

Newsletter for JADR

I. IADRの倫理綱領 (Code of Ethics)

JADR会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

7月から8月にかけて次年度のHatton Award 国内候補者選考が行われました。近年は応募者も増え、研究内容・発表内容共に優れた者が多く、選考審査もアブストラクトによる一次審査と発表者との討論による二次審査が行われています。ここ数年、審査会でオリジナリティと新規性が懸案となる応募者が目立っています。Hatton Award の応募要領には「応募研究は日本国内で行われた研究とし、・・・時点で未発表のものに限ります。」と明記され、チェックリストが付いているにも拘わらず、既発表とほとんど同様の内容でabstractが記載され、二次審査の発表でも既発表の内容からどれだけ新規に発展したのか不明な場合があります。若手の研究者ですから自分が関係した研究内容の全てを盛り込みたい気持ちも理解できますが、既に発表されたものと新規に明らかとされた内容を区別して研究の発展方向を示した発表になるよう、指導者の先生方をお願いする次第です。

先般、名誉ある学会賞の受賞者が論文のデータ捏造や改竄の指摘を受け、学会賞の取り消しを受けましたが、JADRのHatton Awardの候補者でもあったことなどを考慮して、JADRでは倫理問題を扱う委員会の発足が検討されております。既に、2006年10月に日本学術会議は研究費の不正使用に端を発して「科学者の行動規範」を発表し、全国の大学や研究機関、学協会等で倫理綱領や規定を制定している機関は全体の13.3%と少ないところから「最近国内外で続発した科学者の不正行為には強い危機感を持ち、また再発防止の対策を関係諸機関に促す」と記載しております。また、その背景として「競争的資金等の獲得競争の激化や任期制ポストの増加などに伴い、短期的な成果が求められるなど、科学者を取り巻く環境は大きく変化している」と述べています。IADRでは予めから倫理綱領 (Journal of Dental Research 73(7):1290-1294, 1994) を制定し、会員への周知を行ったり、学術総会時に Ethics Committee 企画のシンポジウムを開催しておりますが、国内の研究者の関心はいま一つ低いようで、海外の参加者と比較して日本人のこのような企画への参加は極めて少ないと感じております。JADR会員の研究水準や成果は国際的に劣るものではないと思いますが、国際的な研究者の育成には科学者の倫理水準についても啓蒙する努力が必要と感じております。

IADRメンバーシップの更新を!

トロントでのcouncil meetingの討議でアメリカや日本の会員

の減少について話題となりました。会員数の最も多い国の減少傾向ですから、看過できない問題です。新しい会費システム (tier due) でアメリカや日本人会員の会費値上げが行われたことやIADR本部からの会費請求事務に混乱があったことも影響していると思われますが、日本人会員の増減は幕張(2001年)やプリズベン(2006年)大会の時に急増し、その後漸次減少している状況にあります。国際学会での活躍が大学の研究者に求められている昨今、IADR学術大会の研究発表や論文発表に限らず、Awardの応募、学会の座長やプログラムチェアへの参加、各研究グループの活動への参加、IADRの各種委員会での活動、などIADRには多様なつき合い方があります。大会参加時に限らず会員資格を更新して頂く様お願い致します。会員資格はIADRホームページのmember ページでの会費納入によって毎年更新する必要があります。IADRの場合は、会計年度が1月から12月までとなっておりますので、年末から年始にかけて会費の納入時期となります。忘れずに更新をお願いします。

第56回JADR総会・学術大会に参加を!

第56回JADR総会・学術大会(2008年11月29日(土)、30日(日))が近づいてきました。大会長の中垣先生の発案でORCA (European Organization for Caries Research) の発表形式で活発な討論が期待されております。本大会の詳細は後の頁に掲載されておりますが、IADR会長のJ.M. 'Bob' ten Cate教授の「IADRの今日・未来」、川島嘉明教授の「局所投与を目的とした微粒子キャリア」の特別講演と「Oral Biofilm Today」「神経活動による骨代謝制御」のシンポジウムなどバラエティに富んだ企画が予定されております。また、「Hatton Awardの国内発表会」「IADR韓国部会との相互交流」「学術奨励賞選考」「PAPFの各DivisionからのTravel Awardによる発表」なども行われますので、会員の皆様にはふるってご参加下さいませようお願い申し上げます。



<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr>

II. 第86回IADR学術大会報告

1. IADR Council Meetingに出席して

日本歯科医学会会長 江藤 一洋
(東京医科歯科大学名誉教授)

NIHに滞在(1973~1976)以来ですから、多分30数年ぶりのカナダです。

JADR会長の小田豊先生のご配慮でIADR Council Meetingに出席できました。JADRからは小田豊会長、高野吉郎教授、村上伸也教授、安孫子宜光教授の4人が出席されていました。7月2日(水)の早朝8時30分から11時30分まで、フェアモントロイヤルヨークホテルで3時間の長丁場の会議でした。オブザーバーですので一番後の席で氏名点呼を受けた後は暇でしたので、Council Meetingのレジメを少し紹介してみます。会員数(2008年現在)は米国人3,728人、日本人1,754人、欧州大陸人(多分独・仏)842人、英国人506人、ブラジル人495人、東南アジア人466人、スカンディナヴィア人346人、中国人167人、韓国人149人で、日本人の数は断崖2位であること、またJDRへの投稿数(2007年)で見ると、米国120、日本105、英国44、ブラジル41、中国40、とやはり日本は第2位です。会員数比からみると中国の、多分大学の研究活動がかなりレベルが上ってきているのかがわかる数値です。

さて、会議はDeborah Greenspan会長のよどみない司会で坦々と進んでいき、Christopher Fox専務理事の報告もまた、まことに手際がよい。ネイティブの英語で会議を仕切られてしまうと、英語のうまい日本の先生方もさすがに打打禁止の議論というわけにいかないようでありました。

これではChris. Fox専務理事のシナリオ通りに仕切られてしまう。会員数第2位の日本の影響力を強める方法はないものか。せつかくトロントまで来てCouncil Meetingに出席の機会を与えられたのだから、何かJADRのお役に立たなければと、ジェットラグのモヤモヤした頭でぼんやり考えた末、シナリオを実質的に作るChris. Fox専務理事と親しくなればいいのだ、そうすれば事前にその内容を知ることも可能になる。そうだ、今年11月の日本歯科医学会総会に招聘しようと、すぐに黒田敬之・前IADR会長に相談しました。黒田先生は二つ返事でIADRの会長に手紙を書かれ、Chris. Fox専務理事の旅費はIADRで負担のOKをすぐにとって下さいました。滞在費はJADR、歯科医学会の開会式と会頭招宴は総会側でということ、さっそく、小田会長、大塚会頭と小生の名前で招待状をしたため、Chris. Fox専務理事の来日が決まりました。ご関係の先生方のお陰です。

IADRの中でのJADRの存在感を強めていくことは今後も若い世代への大事な仕事と思われまます。

2. 2008 IADR Basic Research in Periodontal Disease Award受賞のお礼と総会感想記

中山 浩次
(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科口腔病原微生物学分野)

数年前に長崎大学の加藤有三名誉教授の推薦を頂いてIADRのDistinguished Scientist AwardのBasic Research in Periodontal Disease Awardに応募しました。その年に選ばなくても以後5年間候補として継続審査されるのですが、CV等の情報が古くなってきましたので今回、更新作業をしました。その際、加藤先生がIADRを退会されているとのことで大阪大学名誉教授の岡田宏先生に推薦者になっていただきました。お蔭様で幸運にもこのたび受賞することになりました。研究を一緒に遂行してくださった方々、応募にあたりお世話になった方々に心より御礼申し上げますとともに審査の任に当たられた方々に感謝いたします。この賞は1965年に創設され、日本人受賞者としては岡田先生(1998年受賞)、村山洋二先生(岡山大学名誉教授、2002年受賞)に次いで3人目になります。過去の受賞者にはT. Lehner, R. C. Page, S. Socransky, R. Genco, J. Slotsなどの名前があります。学会場では安孫子教授(IADR理事)をはじめ多くの先生方からお祝いの言葉を頂きました。この場をお借りし、改めてお礼申し上げます。JADRの事務局から受賞記念の総会紀行文を書くようにとのことでしたので学会にて会った外国の研究者とのやり取りや総会の感想について思いつくままに以下書いてみました。

同賞の昨年の受賞者R. Darveauおよび3年前の受賞者M. Curtisには歓迎レセプションで会い、Porphyromonas gingivalisのLPSの話聞くことができた。Darveauは前回のゴードン会議(歯周病部会)(2006年イタリア)の折にLPSの脂肪酸の本数は培養条件で変化し、一つの仮説としてdeacylaseの存在を述べていたが、今回のlecture speechではそのことについてまったく触れなかったのが正しくてもどうもその仮説は問題があったと正直に述べてくれた。しかし、P. gingivalisのLPSがMD2には結合するがその後の反応性が悪いことで大腸菌などのLPSの効果を阻害する活性があることには変わりがないと強調していた。P. gingivalisのlipid AのTLR反応性については議論のあるところだが関係者が胸襟を開いて真実を知る努力をすべきだと述べていたのが印象的であった。CurtisはP. gingivalisのLPSの糖鎖は2種類存在し、従来彼らがanionic surface polysaccharide (APS)と称していたものがLPSの一つの型(A-LPS)であることを述べた。これについては最近、J. Bacteriol.に彼らが論文を発表していたので知っていたがhot phenol法で抽出するとLPS画分には従来のLPS(O-LPS)とともにA-LPSも含まれると言っていた(と聞き取った)。直接話しをすると予備的な研究成果についての情報も得られることがある。

G. Hajishengalisとはホテルが同じで朝、食事をとっているとやってきてかなり話し込んだ。研究の話もしたが、個々の大学院生の研究姿勢に個性があり、一回実験しただけですぐにその結果を鵜呑みにしてつぎの実験にとりかかろうとするものや、1つの仮説を証明するため何度となく実験をやったなかなか次の段階に進もうとしないものがあると話していたので、以前読んだ話を紹介した。それはノーベル賞学者の福井謙一氏が書いたものだが「研究は大雑把すぎてはもちろんいけないが、狭い範囲に一生懸命エネルギーを使うとほとんど成果をあげられないまま一生を終る」と論じていた。なにごとにも中庸が大事であるということのようだ。

Y. T. A. Tengは今回 osteoimmunology についてのシンポジウムを企画し、骨代謝、特に破骨細胞分化についてのレビューを行った。いつもながら上手な司会進行で discussion にも充分時間を取り、興味深かったが、面白い企画の割には聴衆が少なかつたのが残念だった。2年前、日本細菌学会総会で同じようなシンポジウムを組み、高柳先生（東京医科歯科大）、高橋先生（松本歯科大）、松尾先生（慶応大）、および大原先生（感染研）を講演者として呼びましたが、その折はもっと関心が高かったことを考えるとこの分野は日本人が先導していく必要がありそうと感じた。Teng自身の研究は樹状細胞から破骨細胞が*in vitro*で誘導されるというものであり、炎症局所ではマクロファージ様の前破骨細胞からM-CSF/RANKLによって誘導される破骨細胞とともに樹状細胞由来のものが誘導されるという仮説を披露した（彼自身は暗に後者の方が主体としたいのだろうが）。

D. Kinaneとは前回のゴードン会議で知り合ったが、会場で西村先生（広島大）と立ち話をしていたときに偶然通りがかり、来年のゴードン会議（彼がchairperson）について話をした。前回の keynote speaker は2回続けては選べないと断られたが参加はOKとのことだった。このゴードン会議はせいぜい200人程度の会で約一週間同じ会場で朝から夜遅くまで発表があるので自然と親しくなる。IADR総会とは違った良さがあり、機会があれば参加を勧める。

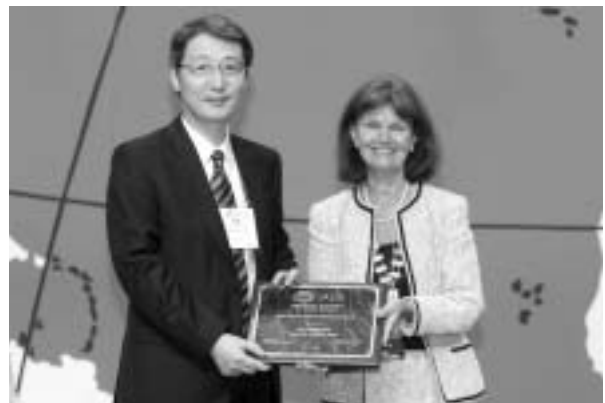
S. Dashper はメルボルン大学の E. Reynolds のラボでP. gingivalis の鉄代謝についての研究を行っている。Reynolds のもとには私の教室から庄子助教、佐藤助教がお世話になった。オーストラリアではこの領域で随一のラボであり、研究機器の整備も申し分ない。ちなみにReynoldsはリカルデントの特許をもっている。Dashper は Reynolds ラボで細菌学における右腕的な存在で大学院生（東南アジアから多くきている）の研究の指導に直接関わっている人物である。ほんの立ち話程度の会話しかできなかったが、鉄代謝関連の話を熱く話してくれた。

D. Grenier とは10年以上前から共同研究をしているが、一度もあったことがなかった。彼はカナダのラバル大学にて以前は D. Mayland のもとで研究していたが現在はPIとして活発に研究している。今回、会場で初めて会って話をする事ができた。Mayland はすでに5年前にリタイアしたのだが、また、

大学に戻っているとのことで冗談に「ポストドクをやっているのか」と言ったら笑っていた。実際は大学の運営に関するポストとのこと。

R. Lamont は大変才能のある研究者であり、今回は P. gingivalis の phosphotyrosine phosphatase がバイオフィーム形成に関する重要なシグナル調節因子であるというポスターを出していた。発表時間外だったが彼にポスターを説明してもらった。この研究は先日 Mol. Microbiol. に受理されたと言っていた。

特別講演を行った B. Finlay はカナダを代表する病原微生物学者であり、たいへん上手に腸管出血性大腸菌の宿主細胞や常在微生物叢との interaction について講演した。病原体、宿主、そして常在微生物叢という3つの環の相互関係で感染が成立する。病原体が宿主に影響を与えることは周知のことであり、とくに近年では宿主細胞への積極的な影響を対象とした細胞微生物学（Cellular Microbiology）なる学問分野ができた。Finlay はこの分野の旗手の一人であるが、今回の講演のなかで注目すべき展開は病原体の存在によって常在微生物叢の微生物の勢力分布が大幅に変化することである。腸内細菌叢のなかではとくに Bacteroides 属菌が変化する結果が示された。考えてみると、歯周局所の病変が歯肉炎から歯周炎へと変化する際に、歯周局所の細菌叢はグラム陽性菌主体からグラム陰性菌、それも嫌気性グラム陰性菌主体に変化する。教科書的には歯周ポケットが深くなると酸素濃度が減少し、より嫌気性菌の増殖に有利に働くからと考えられるが、歯周病細菌が積極的に歯周局所の細菌叢の変化をもたらしているのかもしれないし、歯周病細菌によって宿主細胞から出される反応性の物質が歯周局所の細菌叢の変化をもたらすのかもしれない。いずれにしても3つの環の全体を理解しないと感染病態を理解したとはいえないということか。彼の講演において内容以外で感銘を受けたことは早朝から多くのIADR会員が彼の講演を聞きに来ていたことである。歯科領域とは異なる専門分野の講演にこのように多くの人が朝早くから集まるとは私にとっては予想外であり、IADR会員の知的好奇心の高さに驚くとともに安堵する思いを抱いた。（英文字の人名は敬称を省略した。）



授賞式にて、Deborah Greenspan会長と記念撮影

3. Mineralized tissue

柴田 俊一

(北海道医療大学歯学部口腔構造・機能発育学系組織学分野)

IADRにおける mineralized tissue の研究はASBMR (米国骨代謝学会) と異なり、歯の硬組織 (主にエナメル質、象牙質) の研究が多いことが特徴としてあげられる。今回は会期3日目の午前中にミシガン大学の Dr. Hu とNIHのDr.Fisher がchair person となって、tooth genetics のセッションが行われた。最初にミシガン大学の Simmer 教授から “New perspectives on dentin and enamel proteins” というタイトルのレビューが発表された。内容はエナメル質、象牙質の非コラーゲン生タンパクの最新の研究状況に関するものだが、最も詳しく述べられていたのは、Simmer 教授のもとで研究されている山越先生が手がけられたDSPP (dentin sialoposphoprotein) に関することであった。その後、3題はヒトを対象にしたゲノム解析の発表であった。そのなかでは、英国 Leeds 大学からの発表はエナメル質形成不全症と、盲目が併発する珍しい疾患に関するものであった。このような研究はいずれ遺伝子治療に結びつく可能性があるもので、一見派手ではないものの非常に重要な研究だと思われれます。最後にChairperson の Dr. Hu からエナメルインノックアウトマウスに関する発表があった。内容はノックアウトマウスの歯において、象牙質はほぼ正常に形成されるものの、エナメル象牙境近傍を除いて、エナメル質の石灰化がほとんど阻害されているというものであった。ノックアウトマウスの場合、代償機構が働いて、予測された結果がでない場合も見られるが、本研究はほぼ予測通りのたいへん見事な結果であった。

その他のセッションとしては、私の発表の時間と重なったため、見られなかったがエナメルタンパクに関するものもあった。ここでも6演題中3題は上述のSimmer 教授のラボからのノックアウトマウス、トランスジェニックマウスによるものであった。やはりノックアウトマウスをルーチンで作成できるシステムを持つ研究室は強力で、米国においても寡占化が進んでいるという印象を持った。そのような中で最終日に行われた Bone/Dentin cell signaling のセッションでは、東京医科歯科大学の難治研、薬理学から若手による発表が見られ、健闘ぶりが目を引いた。

ポスターセッションはもちろん玉石混合ではあるものの、虚をつかれるような発表もあり、じっくり見てまわるとたいへん興味深いものも多数認められた。

最後に私事で恐縮ですが、私自身大学での教育業務に追われてIADRは2年ぶりの参加となりましたが、このような学会に出席するとやはり研究に対するモチベーションがあがるので、多少無理しても毎年来るべきものであると痛感した次第です。

4. Osteoimmunology, Mineralized Tissue

畑 隆一郎

(神奈川歯科大学学生体機能学講座生化学分子生物学)

第86回IADR学術大会は7月2日 (水) から5日 (土) までカナダの Torontoで開催された。7月1日 (火) の午後、シカゴ経由でトロントに着くと、気温は25度位であったが、湿度が低いのか暑さは感じなかった。Toronto はミシガン湖の西岸にある人口500万のカナダ第一の都市で、downtown に着くと高層ビルが多く、ホテルの33階に宿泊したが、窓の外は見上げるような摩天楼が林立していた。

1日の夕方の開会式に行くに参加者が多く、着席できないほどだった。開会式の最後に今年度のHatton Awardsの発表があった。昨年11月のJADRで今年度の日本代表の発表を聞いてレベルは高く感じたが、残念ながら今回は日本からの入賞者はいなかった。

学会では我々が発表している頭頸部癌と骨の分野の会場に出席した。7月3日 (木) の午前に行われた “Osteoimmunology and Host Defense in the Periodontium” のシンポジウムは現在注目されている分野でもあり、参加者も多く議論も活発で大幅に時間が超過して行われた。1998年にYasudaらが破骨細胞の分化を制御する中心的なサイトカインである破骨細胞分化因子RANKL (receptor activator of NF- κ B ligand) を、また、Laceyらが骨を保護する因子 (Osteoprotegerin) の Ligand (OPGL) をクローニングし、これらがともにT細胞上に発現する樹状細胞活性化因子としてすでにクローニングされていた分子であるTRANCE (TNF-related activation induced cytokine) と同一であることから、骨の代謝と免疫系の関係が注目された。その後2000年に発表された「T細胞がRANKLとIFN- γ のシグナル伝達クロストークを介して破骨細胞形成を制御する」という、高柳らのNatureの論文についてのコメントとしてArronとChoiにより、OSTEOIMMUNOLOGY (骨免疫学) という言葉が初めて用いられた。今回のシンポジウムではU.H.Lerner (Umea Univ. Sweden) による「サイトカインとステロイドによる破骨細胞シグナルの制御」、M.Taubman (Forsyth Institute, Boston, USA) による「歯周病と骨免疫学」、H.Kanzaki (Tohoku Univ. Sendai, Japan) による歯周病の治療についての発表に続いて、座長のY.-T.A.Teng (Univ. Rochester, NY, USA) が抗原提示細胞であるdendritic cell (樹状細胞) が破骨細胞に分化することを、細胞膜マーカーを巧みに利用して証明した。これにより免疫系と同様に、T細胞と樹状細胞の相互作用が骨の代謝に重要であることが明らかになり、Osteoimmunology が新たな展開をしていることが感じられた。

午後のMineralized Tissueのポスター会場では、今回 “Basic Research in Biological Mineralization Award” を受賞したミシガン大学歯学部の Renny Franceschi 教授の研究室から、血管新生誘導因子であるVEGFのハイポキシアによる転写活性化に、骨

分化に必要な転写因子である Runx2 が関与しているデータを発表しており、癌の骨転移との関係から興味深かった。また、鶴見大学歯学部深江研究室では、エナメルマトリックスの抽出物であり、歯周組織の再生に利用されているエムドゲイン中のアメロゲニンが細胞分化促進作用を示すデータを発表しているが、今回、太井田準教授らがアメロゲニンの合成ペプチドでも歯根膜細胞の分化促進作用があることを示すデータを発表しており、これによりエムドゲインの分化促進作用が、試料に含まれる TGF- β などによるものばかりではなく、アメロゲニンあるいはその分解ペプチドそのものが確かに分化誘導作用を示すことが示された。今後、ペプチドに対する受容体の同定など、作用機構の解明への進展が期待される。

Toronto とは、先住民のヒューロン族の言葉で『出会いの場所』という意味だそうだが、確かにこの都市には多種多様な人種の人がおり、種々の言葉が飛び交っている。世界各国の人々が集まる国際会議の開催場所に Toronto は最適かもしれない。

5. Craniofacial Biology Group

高橋 一郎

(東北大学大学院歯学研究科顎口腔矯正学分野)

第86回 International Association for Dental Research, General session は2008年7月2日(水)から5日(土)の間、カナダ、オンタリオ州はトロントにて開催された。人口約250万人のカナダ最大の都市、トロントはオンタリオ州の州都でもあり、五大湖の一つであるオンタリオ湖の湖畔に広がる美しい街である。梅雨まっただ中の仙台を立ち、成田、シカゴを経て到着したトロント空港の入国ゲートでは“Welcome to IADR”の電光掲示の出迎えを受け、トロントでは鬱陶しい日本の梅雨を忘れさせてくれるほど爽やかな好天に恵まれた。到着した7月1日(火)はカナダの独立記念日とも重なり、街は観光客などの子供連れで大変な賑わいを見せていた。そのような中、今大会は、トロント市の中心部にあり、トロントの象徴的存在でもあるCNタワーに隣接するMetro Toronto Convention Centre を中心として、周辺のFairmont Royal York Hotelなどを会場として開催された。これまでのところ公式発表は行われていないが、約5,000名程度が参加したものとおもわれる。また、3,700題あまりの発表が行われたなか、日本からも数多くの演題が発表され、数百名の日本人が参加していたのではないかとと思われる。

さて、Craniofacial Biology Group の主催するプログラムでは初日の午後からセッションが始まり、約160題が口演・ポスターにて発表された。近年の再生医療の盛り上がりを反映し、Dental developmental biology に関連する Oral session は立ち見が出るほどの盛況であった。大会2日目の午前中のセッション

ではDr. Richard Maas のグループから、歯の形成における Wnt signalの役割に関する発表が行われ、APCの抑制に伴う Wnt signalの活性化によって、生後の口腔上皮細胞からも歯胚が発生しうることが報告された。すなわち、出生後に採取した口腔粘膜上皮の細胞からも歯胚が形成できる具体的可能性を示したことになる。また、Shimazuらは多根歯であるマウス臼歯における歯根形成とヘルトビッチの上皮鞘の伸長との関連を3次元的かつ経時的に解析した結果を報告した。さらに、UBCのSzabo-Rogersらは、顎顔面の形態形成における nasal pit 上皮の役割を解析し、この部位の上皮が、間葉組織からの鼻甲介と鼻骨の形成を誘導することを示した。

近年、歯科医学研究者のみならず、多くのフィールドの研究者が再生医療研究の一環として歯の再生を目標とした研究を行っている。また、研究の範囲も、個々の組織の発生のみならず、顎顔面の発生メカニズムを広範にカバーするようになってきている。このような環境の中、我々は、より一層の研究の活性化と学際的な研究ネットワークの拡充を目指していかなければならないと感じた次第である。

6. Dental Materials - Adhesion

二階堂 徹

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
摂食機能保存学講座歯蝕制御学分野)

IADRに出席するのは3年ぶりということもあって、新鮮な気持ちで出席することができた。全体的な印象としては、口頭発表、ポスター発表ともに Dental Materials グループの演題数が非常に多くて、聴きたい演題が複数のセッションでバッティングしていたり、ポスター会場も広くて、思うように目指すポスターに到達できなかつたりして苦労した。

私の専門分野である「象牙質の接着」にテーマを絞って感想を述べさせていただくと、昨今の象牙質接着システムの開発は、リン酸エッチングによるウェットボンディングシステムからセルフエッチングシステムへという流れであったが、今回のIADRでは新規性の高い材料が少なく、接着システムの開発や性能評価に関する研究よりも、接着耐久性や二次う蝕に関する研究が注目されていたように思う。

接着に関するセッションでは、北海道大学の佐野教授が Keynote speakerとして Microtensile test や Nanoleakage などのこれまでの一連の研究成果について講演され、会場は超満員で大変な人気であった。最近の象牙質接着の耐久性に関する研究では、脱灰コラーゲンのMMP (matrix metalloproteinase) 活性の劣化への関与が注目されている。特にクロロヘキシジンがMMP活性を抑制することから、これを前処理として使用した場合の接着耐久性についての報告がいくつかあった(岡山大学、西谷先生など)。ジョージア医科大学の Pashley 先生、Tay

先生らは、接着界面に生じる Nanoleakage を再石灰化によって補う Guided Tissue Remineralization (GTR) 法を提案しており、これに関する研究発表も興味深かった。教室の保坂らは、接着耐久性をボンディング材の吸水劣化の面から検討しており、親水性モノマーである HEMA 含有ボンディング材の高い吸水性について報告した。

我々はこれまで修復物と象牙質との間に生じる二次う蝕の発生について研究を行ってきたが、セルフエッチングプライマーシステムを用いた場合、二次う蝕は発生せず、むしろ象牙質接着界面には酸、アルカリに抵抗する層が形成されることがわかり、これを Acid-base resistant zone (ABRZ) として提唱してきた。本学会では、ABRZ の微小構造について SEM/TEM (二階堂他) と FESEM/EDS (飯田他) で観察した結果について報告したが、多くの研究者とディスカッションすることができ、大変有意義であった。

象牙質接着の分野では、近年ブラジル、トルコの研究者の活躍が目立っており、さらに今回の IADR では、中国、韓国、タイなどのアジアの研究者の発表も増えたように感じた。特にこれらの国々では若手研究者が確実に育ってきている。日本の若手研究者には、是非、積極的に彼らと交流を深めて新しい時代のネットワークを作っていただきたい。

7. Prosthodontics Research

北川 昇

(昭和大学歯学部高齢者歯科学教室)



トロント市内の歓迎フラッグ

学術大会が開催されたトロントはカナダ最大の都市で、ナイアガラ観光の拠点としても有名なオンタリオ湖を望む風光明媚な街である。学会会場の Metro Toronto Convention Centre はトロントの名所、CN Tower や Rogers Centre (旧 Skydome) の隣に位置していた。サマータイムの採用で夜8時過ぎまで明るく、東京の猛暑に比べると学会開催にはベストシーズンだったと思われる。

本大会の総演題数は、3,597題。会期中の4日間に Prosthodontic

Research のセッションでは、口演発表42題、ポスター発表138題、計180演題の発表があり、活発な discussion が行われた。今回、この分野での日本からの発表は、47演題(口演6題、ポスター41題)で、前回の New Orleans 大会を大幅に上回った。会場においても日本人研究者と多数お会いし、参加者の多さを実感した。なお、中国からは地震と査証の関係で参加者が少なかったとの話を会場で耳にした。

Prosthodontic Research のセッションでは、例年と同様に補綴材料・補綴装置(クラウン・ブリッジ・義歯・インプラント等)の基礎から臨床に至る、多数の発表が行われていた。日本人の演題は、3日目の Outcomes Studies and Biological Prosthodontic Research が多かった。口演発表の中で、本邦においても増加傾向にあるインプラントオーバーデンチャーの下顎2本埋入に対する早期荷重のプロトコールが示されていたのは興味深かった。また、今回の大会では、Biomechanical Response and Control at the Bone-Biomaterial Interface のタイトルで(社)日本補綴歯科学会とのジョイントシンポジウムが開催された。オーガナイザーを補綴学会・副理事長の佐々木啓一先生(東北大学)が務めた。C. Simmons 先生(トロント大学)、小川隆広先生(UCLA)、野田政樹先生(東京医科歯科大学)さらに、佐々木先生がシンポジストとして、メカニカルストレスに対する細胞の相互作用に関する最新の知見を含んだ各方面からの幅広い研究成果が発表された。特に小川先生の Nano-micro-hybrid チタン表面とUVに関する研究は今後の発展が期待でき、大変感銘を受けた。次年度は大学関係者には参加しづらい4月にマイアミで開催されるが、大学院生を連れて是非参加したいと思う。

8. Prosthodontics Research

木津喜 裕子, 野崎 浩佑, 駒田 亘

(東京医科歯科大学医歯学総合研究科摂食機能保存学分野)

第86回大会がカナダのトロントにて開催された。会場となった Metro Toronto Convention Centre は、大陸横断VIA鉄道の終着駅で地下鉄の中心である Union Station から歩いて数分の立地で、側には広いオンタリオ湖やトロント市内を一望できる高さ553.33mのCNタワーがあり、国内有数の会場の一つである。

Prosthodontics Research 分野では、CAD/CAMの発達により近年飛躍的に進歩を続けているオールセラミックシステムを含むメタルフリー補綴治療に関する基礎的・臨床的研究が数多く報告された。とりわけ臨床成績にかかわる補綴物のデザインや接着システム、支台築造法は非常に興味深い報告があり、ここではそれらのうちいくつかを紹介する。

補綴物のデザインに関して、Y. W. Gungらは3D-FEAを用いて、CAD/CAMで作製した上顎犬歯のオールセラミッククラウンに舌側から荷重を加えた際の応力集中について評価し、コ

ーピングが薄い場合に唇側歯頸部に応力が集中し、また舌側からの加重部位が影響することを報告した。コーピングが薄くなる場合には、唇側歯頸部の支台形態や、切縁から離れた位置で咬合させること、そしてコーピング厚さの調整が重要であることを示した。

オールセラミックのレジンセメントとの接着に関して、K. Hikitaらはジルコニアに対する2種類のシリカコーティング法の効果を剪断接着強さにより評価した。ロカテックシステムはシリカ含有の酸化アルミナを高圧で射出するためコーピングのマージン部の保護が困難であったが、シラノペンはシリカ含有のガスを使用し熱処理を行うため、形態の変化が生じないことが特徴であり、またチェアサイドでも使用可能である。剪断接着強さはシラノペンがロカテックシステムよりも優位に高く、臨床上有効であることを示した。

ファイバーを用いた支台築造法に関して、A. R. Glovaniらは6, 8, 10mmの異なる長さのポスト孔に2種の材料を用いて築造し、クラウンで覆った際の圧縮強さを評価した。破折までの荷重を測定したところ、鋳造ポストではポスト孔の長さによる破折までの荷重に差は見られないが、グラスファイバーポストでは6mmの長さのものは10mmと比べて低い値を示すと報告した。

他に、R. Kosonittikul らや M. C. Lee らによる、セラミックの厚さと象牙質の色との関係や、歯肉の色がセラミッククラウンの色調に及ぼす影響について、L*a*b*表色系等により詳細に評価した報告も見られた。

以上のように、日本国内の多くの研究機関で注目されているメタルフリー補綴治療に関わる研究は、国際的にも注目されており、多方面にわたる研究が進められていることを改めて認識した。

また、ここで紹介した演題以外にも、歯科材料や技工システム、補綴物のデザイン等に関する研究、口腔機能等に関わる基礎的な研究、補綴治療の臨床的な技術や評価、調査に関する研究、インプラントに関する研究等、多岐にわたる発表があり、様々な面からの有益な情報の得られる大会であった。

9. Neuroscience/TMJ

隈倉 慎介

(東京歯科大学有床義歯補綴学講座)

今回、カナダのトロントで行われたIADR General Sessionの総演題数3,597のうちNeuroscience/TMJ分野は口演、ポスターを含めて126演題であったが、半数を超える64演題が日本からの発表で、他の分野と比較して日本ではこの分野の研究が活発に行われていることが顕著であった。この分野の内容は主にTMD, Orofacial Pain, Bruxismの3つをメインテーマとしており、基礎的な神経生理学的アプローチから精神医学的なア

プローチまで幅広い視野で研究が行われているのが印象に残った。

私が興味を持ったものをいくつか紹介する。Sleep Bruxismを伴うApnea患者に対して75%前方位型、25%前方位型、非前方位型の3種のOral Applianceを用いてSleep Bruxismに及ぼす影響を調査し、2種の前方位型のスプリントは非前方位型と比較して、Bruxism episodeを減少させることを明らかにしたという報告や、Tooth Wearによって若年 Sleep BruxerとControlを識別できるかどうかをROC曲線を用いて検討し、若年者のTooth WearはSleep Bruxismの存在を示唆し、歯種別では犬歯が最も高い敏感度、大白歯が最も高い特異度を示すことを明らかにしたものがあつた。この他にも、片頭痛患者の三叉神経の感覚系を調査したものや、咬合に関する不定愁訴を持つ患者とControlにおいて厚さ識別能力および心理検査を行い両者の比較を行ったものなども興味深い内容であった。

私自身は「Relation between Buccal Mucosa Ridging and Viscoelasticity of Oral Mucosa」というタイトルでポスター発表を行った。専門分野の研究者だけでなく専門分野外の研究者と討論できたことは私の研究にとっても大きな収穫であり、歯科医学における世界規模の学会に参加し発表することによって、「世界」を肌で感じる事ができたことは、今後、私の研究や臨床に大きく影響を与えるだろう。そしてチャンスがあればいつかまた発表したいと思う。

10. 第86回IADR学術大会に参加して

小澤 重幸

(神奈川歯科大学顎顔面外科学講座)

第86回IADR学術大会に参加したので報告する。今年の第86回IADR学術大会は7月2日(水)から5日(土)の4日間でカナダのトロントで行われた。今年度のIADRは土地柄がよいためか、日本からの参加者が多いように感じた。事実、神奈川歯科大学からも参加者が20人を超えていた。私自身も発表を予定していたため、抄録が受け取られたのを確認後、すぐに飛行機の手配を行ったが、すでにトロントへの直行便の飛行機は満席寸前で、カナダへはニューヨーク経由でないと到着しないのではと少々気を揉んだ。

学会に参加して感じたことは、最近インプラントや再生の研究が盛んにおこなわれていることもあり、骨に関係する研究テーマが多く見受けられ、シンポジウムにおいても時間がおしているにもかかわらず発表者への質問が殺到していた。内容としては、免疫系細胞、主にT細胞を介した破骨細胞の活性化経路の追及から始まり、樹状細胞が破骨細胞に分化するといったことまで報告していた。私自身は頭頸部扁平上皮癌と抗腫瘍効果を示すケモカインとの関係について研究を行っており「p38 signaling up-regulates BRAK expression in squamous

cell carcinoma」のタイトルでポスター発表を行った。ここ数年オーストラリア、ニューオーリンズと連続して参加させていただいており感じたことは、歯科医師であり頭頸部癌患者を取り扱う機会も少ないという理由からか、癌研究の発表が減少しているように思えたことが残念であった。ただ一方、興味を持ち高度な質問をしてくる参加者が存在することも本学会の喜ばしい点であり、同じ考えを持つ研究者同士で質疑応答に意見を交わしうれしくもあった。余談となるが、私はカナダへの訪問は初めてであり、開会式を行うまでの空き時間でグレイハウンドに飛び乗り、一般の観光客と同様にナイアガラ・フォールズへ霧の乙女号に乗船しに行った。世界の3大滝と呼ばれるだけあって日本では体験できないであろう壮大なスケールであった。学会に参加した参加者たちにこのようなアミューズメントを用意することも本学会の良さだと私自身理解している。とにかく今回のIADRは参加者数も多く成功に終わったと考えられ、また更に今後IADRが発展することを期待している。

11. 第86回IADR Toronto大会に参加して

谷和 聡子

(大阪歯科大学歯科麻酔学講座)

第86回IADRトロント大会を経験してきましたのでここに報告させていただきます。

会場となったメトロコンベンションセンターはオンタリオ湖にほど近く、ハトよりもカモメが多かったのが印象的でした。初めてのトロントは緯度が高いこともあり、気温はとても低く日本の7月を心地よく裏切ってくれました。しかし初めての学会発表、しかも開催地が海外ということで、とても緊張していた私の目には可愛いカモメも、ただただ心細く望郷の念に駆られる対象にしか映っていませんでした。センター内のポスター会場はとても広く、色とりどりのポスターが所狭しと並んでいて、圧巻！でした。次々に興味を惹かれるポスターを求めて、広い会場を見てまわっているうちに、あっという間に1日が終わっていきました。またポスター会場の階上では各部屋でオーラルでのセッションが行われ、立ち見が出るほど賑わってました。私自身、英語が堪能ではない為、十分に楽しめなかったのが残念でした。自身の今後の課題とします。

私のポスター発表は2日目の午後、落ち着いた1日が始まりました。

私の研究は、ラットの唾液腺を用いて麻酔前投薬の唾液分泌の阻害効果を検討しました。Pirenzepine, Methoctramine, 4-diphenyl-acetoxy-N-methylpiperidine (4-DAMP), および Glycopyrrolate の四種類の抗コリン薬を用いてラットの下顎腺からの唾液分泌に関して調べていきました。

実験ではまずAcetylcholine (ACh) 投与時のラットの血圧の変動を検討しました。血圧はAChの濃度依存性に上昇し、上記の各種の薬剤の投与後における、ACh投与による唾液の分泌量および唾液内タンパク質濃度を測定しました。4-DAMPおよびGlycopyrrolateは唾液分泌を強力に阻害しましたが、Methoctramineの阻害効果は弱く、PirenzepineはMethoctramineよりは強い抑制効果をあらわしたものの4-DAMPおよびGlycopyrrolateよりはかなり低い抑制力を示しました。

4-DAMPとPirenzepineに起因する唾液のタンパク質濃度の縮小はN ω -nitro-L-arginine methyl ester (L-NAME) によって阻害され、L-NAMEは唾液分泌抑制効果を示しました。今回使用したGlycopyrrolateは薬循環および呼吸器官への効果が強いので、いまでは多汗症などの特殊な疾患にのみ使用され、前投薬としては日本では使用されなくなったのですが、他の薬剤との併用で臨床応用が可能か検討しました。

今後は抗コリン薬に限らずH2レセプター阻害薬や抗不安薬などの唾液分泌阻害効果を検討して行きたいと思っています。

この学会で各国の先生と話が出来たり、親交が持てたりとてもいい刺激を受けました。確かに言葉の壁はありましたが、真摯につたない私の話に耳を傾けてくれ、私から一生懸命言葉を引き出してくれました。この刺激を求めて、少しでもレベルアップしてまた参戦したいと思いました。

III. 2008 IADR Council Meeting報告

JADR会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

IADR 2008 Council Meeting はIADR学術大会開会式当日の午前(7月2日(水)8:30)にFairmont Royal York Hotelで開催され、各DivisionとScientific groupの代表66名とFDI, Federation, SectionからのObserver 19名が参加した。日本からは小田会長、高野副会長、村上財務担当理事が出席した。また、Observerとして日本歯科医学会会長の江藤一洋先生も出席された。審議された事項の概要を以下に記載する。

1. 昨年, IADR Global, Regions, Divisions, Sections の構成に編成し直すためのIADRの Constitution が承認された。今回の Council MeetingではIADRの Regional structure を North America, Latin America, Asia/Pacific, Africa/Middle East and European の5 Region とすることが承認された。また, IADRの年次大会とRegional Meeting, Division and Section Meetings のスケジュールについても提案された。従って, 次の段階として各 Region は Regional Constitutions の作成と Regional Boards の選出, Regional Meeting の開催が課題となる。

IADR Region	Divisions	Non-Divisional Sections
North American	AADR CADR Mexican Division	
Latin American	Argentine Brazilian Chilean Venezuelan	Colombian Costa Rican Panamanian Peruvian Uruguayan
European	ESDR CED Irish Israeli Scandinavian	Russian
African/Middle East	East and Southern Africa Egyptian Kuwaiti Nigerian South African	Iranian Jordanian Saudi Arabian Sulawesi
Pan Asian Pacific	Australian/New Zealand Chinese Japanese Korean Southeast Asian	Indian Mongolian

DRAFT Regional Meeting Schedule

Year	Regions				
	North America	Latin America	Europe	Africa/Middle East	Asia Pacific
2008	IADR General Session (IAGS)	Division and Section Meetings (d&s)	Regional Meeting Only- No Separate d&s (RM)	RM	d&s
2009	IAGS	d&s	d&s	d&s	RM
2010	d&s	d&s	IAGS	RM	d&s
2011	IAGS	d&s	d&s	d&s	d&s
2012	d&s	IAGS	d&s	d&s	RM
2013	IAGS	d&s	d&s	d&s	d&s
2014	d&s	d&s	RM	IAGS	d&s
2015	IAGS	d&s	d&s	d&s	d&s
2016	d&s	RM	d&s	d&s	IAGS
2017	IAGS	d&s	d&s	d&s	d&s
2018	d&s	d&s	IAGS	RM	d&s

IAGS = IADR General Session, RM = Regional Meeting, d&s = Division and Section Meetings

- Hatton Award について、2008年の候補者より 1st place winners の賞金を\$1600, 2nd place winner の賞金を \$800 とする。2009年の候補者より、航空料金と5日のホテル代を Unilever Oral Care がサポートする。
- 新たな Divisionとしてペルー、コロンビア、チリが承認され、新たな Sections としてエクアドルが承認された。また、エジプトは会員数が13名と少ないため Division の取り消しが承認された。
- IADR Practice-Based Research Network の発足が承認された。
- 2014年の IADR General Session の開催地として Capetown, South Africa, July 9-12, を決定。
- 2006年度IADR 決算の承認と2008-10年度予算の承認。
- JDRの発行から12か月後に、会員は Free Access が可能となるシステムを導入する。
- 発行経費の関係からJDRの発行を in-house の publishing から commercial publishing house 出版社に移行する。
- IADR Vice-president (2008-2009) の候補として Francois A. de Wet (University of Pretoria, South Africa), E. Dianne Rekow (New York University, USA), Gregory J. Seymour (University of Otago, New Zealand) が選考され、本年の投票に付されることとなった。

10. 2009年より、全ての IADR Award, Fellowship, Grant applicants はHonorary Membership を除いて “be a current member of, or at the time of submission have made bona fide application to the IADR” であることが資格要件となる。

11. IADR Board (2008 - 2009) の役員と各種委員会のメンバーの承認

Board of Directors

J.M. ‘Bob’ ten Cate, President

David M. Williams, President-elect

Maria Fidela de Lima Navarro, Vice-president

Deborah Greenspan, Immediate Past President

A.W.G. Walls (2009), Treasurer

Anthony Smith (2009), Editor

Christopher H. Fox (2012), Executive Director

Ahmed E.O. Ogwell (2009), Regional Board Member (Africa/Middle East)

Jukka Meurman (2010), Regional Board Member (European)

Javier de la Fuente (2011), Regional Board Member (Latin America)

Ana Maria Acevedo (2011), Regional Board Member (North America)

Yoshimitsu Abiko (2009), Regional Board Member (Pan-Asian Pacific)

IV. 2008 PAPF Executive meeting報告

JADR 会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

2008 PAPF (Pan Asian Pacific Federation) 役員会は7月4日(金)午後3時からMetro Toronto Convention Center #704会議室で開催され、Japanese Division, Australian/New Zealand Division, Chinese Division, Korean Division, Southeast Asian Division の各代表が出席した。PAPFの今年度会長 Prof. Fan Ming-Wen が欠席のため、Chinese DivisionのDr. Bian Zhuanが議長として進行した。以下に記載する内容が討議された。

1. 2nd Meeting of PAPFの準備状況

Dr. Bian Zhuanから、2nd Announcementを配布され、説明があった。会期2009年9月22日(火)~24日(木)会場Wuhan Science & Technology Conference & Exhibition Center, Wuhan, China, 前回の会議で指摘、要望のあった参加費の軽減については、US\$ 300 (Member) ; US\$ 200 (Student) ; US\$ 500 (One site Visit) とするが会期を通じて食事と会場への輸送料を含むとなった。出来るだけ早い時期にDr. Bian Zhuanから IADR Central Office に IADR Web-site でアナウンスするよう依頼した。

2. IADR Central Office のPAPF総会の予定は2012年に行なうよう要望があった。2012年PAPF総会は South East Asia Division から Thai Section が開催したいと申し出があった。

3. PAFP 代表の現 Regional Board Member 安孫子は2009年の IADR Miami 大会の3月で任期満了になるので、来年に向けて新 Regional Board Member を選出する必要がある。順番を検討したところ New Zealand/ Australia Divisionから代表を選出する意見が多く、Dr. Rod Marshall を推薦する発言もあったが、基本的には New Zealand/ Australia Division で決定し、IADR Central Office への募集に対応することになった。

4. PAFP Officer の順番についての確認

	Toronto	Miami	Barcelona	San Diego	
	2008.7- - -	2009.4- - -	2010.7- - -	2011.3- - -	2012.3- - - 2012
President	Lo	Fan	?	?	?
Division	SEA	ChADR	JADR	ANZ	KADR

従って、ChADRのDr. Fanは2nd Meeting of PAFP Wuhan で大会長およびPAFP 会長となる。

また、Secretary について、スムーズな連携のために Presidentのdivisionから選ぶこととした。

5. IADR/PAFP 2016について

IADR/PAFP 2016は韓国、ソウル市で行いたい旨、KADR から紹介冊子の提出があった。他のDivisionからIADR 2016 Seoulを支持する意見が多かったが、あくまでもPAFPで決定するのではなく、自由に立候補できることを確認した。

V. 第56回国際歯科研究学会日本部会 (JADR)総会・学術大会開催のご案内

大会長 中垣 晴男

(愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、平成20年度の国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会を下記の要領で開催いたしますので、多数ご参加下さいませようご案内申し上げます。

会 期：2008年11月29日 (土)、11月30日 (日)

会 場：学術大会 (愛知学院大学楠元学舎)

会員懇親会 (ルブラ王山)

理事会/理事懇親会 (11月28日 (金) ルブラ王山)

懇 親 会：2008年11月29日 (土) ルブラ王山

準備委員長：加藤 一夫 (愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

大会事務局：〒464-8650 名古屋市中種区楠元町1-100

愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座内

TEL:052-751-2561(内線1352) FAX:052-7512-2566

第56回総会・学術大会ウェブサイト

(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/jadr56/index.html>)

内 容：特別講演、シンポジウム、一般口演、ポスターセッション、展示、その他

演題受付期間：

2008年7月8日 (火) ~9月23日 (火)

事前参加登録締切：

2008年9月30日 (火)

演題登録者は必ず事前登録をお願いします

特別講演およびシンポジウム

特別講演：

特別講演 1；

「IADR Present and Future (仮)」

“IADR Present and Future”

'Bob' ten Cate 教授 (IADR会長, Academic Centre for Dentistry Amsterdam)

特別講演 2；

「局所投与を目的にしたPLGA微粒子キャリアと今後 (仮)」

“Drug delivery applications of supercritical fluid technology”

川島 嘉明 教授 (愛知学院大学薬学部製剤学講座)

特別講演 3；

“Bionic medicine revolutionizes clinical treatment in the 21 st century”

Byung Moo Min 教授 (KADR副会長, Department of Oral Biochemistry School of Dentistry Seoul National University)

シンポジウム：

シンポジウム 1；「Oral Biofilm Today」

Chairpersons:

'Bob' ten Cate 教授 (IADR会長, ACTA)

中垣 晴男 教授 (第56回JADR大会長)

Speakers:

C Robinson 教授 (Leeds University, UK)

L. Samaranayake 教授 (Prince Philip Dental Hospital, 香港)

L. Stoesser 教授 (Jena University, ドイツ)

高橋 信博 教授 (東北大学大学院歯学研究科口腔生化学講座)

花田 信弘 教授 (鶴見大学歯学部探索歯学講座)

シンポジウム 2；「神経活動による骨代謝制御」

“Neural Regulation of Bone Metabolism”

Chairpersons:

戸苅 彰史 教授 (愛知学院大学歯学部薬理学講座)

大谷 啓一 教授 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

Speakers:

戸苅 彰史 教授 (愛知学院大学歯学部薬理学講座)

竹田 秀 准教授 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科整形外科科学講座)

宇田川信之 教授 (松本歯科大学口腔生化学講座)

後藤 哲哉 准教授 (九州歯科大学健康促進科学生命科学講座頭頸部構造解析学分野)

参加登録費、抄録掲載料、懇親会費の払い込みについて：
演題申込みの有無にかかわらず、参加者は登録費をお払い下さい。

共同発表者で当日参加されない方は参加登録の必要はありません。

懇親会に参加ご希望の方は懇親会費もお払い込み下さい。

お支払いは**9月30日(火)**までに、専用郵便振替用紙の所定欄に氏名と会員種別、金額等をご記入の上、ご送金下さい。複数名分を一括払い込まれる場合は、振込み用紙の記載欄に全員の氏名、会員種別、金額等の必要事項をご記入下さい。

締切日を過ぎてお支払いいただく場合、参加登録費については正会員の場合1,000円、臨時会員の場合2,000円高くなりますのでご留意下さい。

振替用紙の受領書をもって、領収書に替えさせていただきます。

Co-host: IADR /Japan
IADR / Korea
IADR /South East Asia,
IADR / Australia-New Zealand

Organizer:
Chinese Stomatological Association
IADR Chinese Division
School of Stomatology, Wuhan University

Chairman:
Prof. Fan Ming-Wen

Co-Chairman:
Prof. Bian Zhuan

Further information will be available on the web:
<http://www.PAPF2009.cn>

参加登録費	正会員	事前登録 6,000円 (当日 7,000円)
	学生会員	事前登録 2,000円 (当日 2,000円)
	臨時会員	事前登録 7,000円 (当日 9,000円)
	臨時会員 (学生・大学院生・留学生)	事前登録 3,000円 (当日 3,000円)
懇親会費	正会員・学生会員・臨時会員・臨時会員 (学生・大学院生・留学生)	事前登録 6,000円 (当日 7,000円)

VI. 第57回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会／第2回 PAPF 学術大会のご案内

第57回JADR総会・学術大会は、2009年9月に中国、武漢(Wuhan)で開催される第2回IADR Pan Asian Pacific Federation (PAPF) 学術大会と併催で行われます。
JADR会員の皆様の積極的な参加を期待します。

The 2nd Annual Meeting of IADR Pan Asian Pacific Federation

Date: Sept. 22-24, 2009
Venue: Wuhan Science & Technology Conference and Exhibition Center,
Wuhan, China
Host: IADR Pan Asian Pacific Federation
IADR / China

VII. 2009 IADR Hatton Awards Competition (Miami,U.S.A.) 候補者決定

Hatton Awards選考委員会

2009 IADR Hatton Awards Competitionには20名の応募がありました。IADRから本賞への応募者数は例年通り5名であり、選考委員により、1次選考(書類)、2次選考(英語による口頭発表会; 8月25日(月))を行った結果、以下の先生方が候補者に決定しました。

2009 IADR Hatton Awards Competition (Miami,U.S.A) 候補者名 (五十音順、敬称略)

Junior Category

小島 佑貴 (東京歯科大学4年)

Senior Basic Science Category

泉谷 尚美

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座)

小森 令賀

(神奈川歯科大学小児歯科学講座)

古田 信道

(大阪大学大学院歯学研究科先端機器情報学教室)

八木 優子

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野)

CONTENTS

I. IADRの倫理綱領 (Code of Ethics)	1	I. IADR Code of Ethics	1
JADR会長 小田 豊		Dr.Yutaka Oda : JADR President	
II. 第86回 IADR学術大会報告	2	II. Reports of the 86th IADR General Session in Toronto	2
1 IADR Council Meetingに出席して	2	1. Summary of the 2008 IADR Council Meeting	2
2 2008 IADR Basic Research in Periodontal Disease Award受賞のお礼と総会感想記	2	Dr Kazuhiro Eto : President of Japanese Association for Dental Science	2
3 Mineralized Tissue	3	2. 2008 IADR Basic Research in Periodontal Disease Award	2
4 Osteoimmunology, Mineralized Tissue	3	Dr. Koji Nakayama : Nagasaki Univ.	2
5 Craniofacial Biology Group	5	3. Mineralized Tissue	3
6 Dental Materials - Adhesion	5	Dr. Shunichi Shibata : Health Sciences University of Hokkaido	3
7 Prosthodontics Research	6	4. Osteoimmunology, Mineralized Tissue	3
8 Prosthodontics Research	6	Dr. Ryuichiro Hata : Kanagawa Dental College	3
9 Neuroscience/ TMJ	7	5. Craniofacial Biology Group	5
10 第86回IADR学術大会に参加して	7	Dr. Ichiro Takahashi : Tohoku Univ.	5
11 第86回IADR Toronto大会に参加して	8	6. Dental Materials - Adhesion	5
		Dr Toru Nikaido : Tokyo Med. Dent. Univ.	5
		7. Prosthodontics Research	6
		Dr. Noboru Kitagawa : Showa Univ.	6
		8. Prosthodontics Research	6
		Dr. Yuko Kizuki : Tokyo Med. Dent. Univ.	6
		Dr. Kosuke Nozaki : Tokyo Med. Dent. Univ.	6
		Dr. Wataru Komada : Tokyo Med. Dent. Univ.	6
III. 2008 IADR Council Meeting報告	8	9. Neuroscience/ TMJ	7
		Dr. Shinsuke Kumakura : Tokyo Dental College	7
IV. 2008 PAPF Executive meeting報告	9	10. Summary of the 86th IADR General Session	7
		Dr. Shigeyuki Ozawa : Kanagawa Dental College	7
		11. Summary of the 86th IADR General Session	8
		Dr. Sawako Taniwa : Osaka Dental College	8
V. 第56回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会開催のご案内	10	III. Report of the 2008 IADR Council Meeting	8
		Dr.Yutaka Oda : JADR President	
VI. 第57回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会／第2回PAPF学術大会のご案内	11	IV. Report of the 2008 PAPF Executive Meeting	9
		Dr.Yutaka Oda : JADR President	
VII. 2009 IADR Hatton Award Competition (Miami,U.S.A.)候補者決定	11	V. Announcement of the 56th JADR General Session	10
		Dr.Haruo Nakagaki : Aichi Gakuin Univ.	10
		VI. Announcement of the 57th JADR General Session/ Second Meeting of IADR PAPF	11
		VII. 2009 Hatton Awards Candidates from JADR	11

●編集後記●

今年の日本の夏はゲリラ豪雨に襲われるなど、不安定な天候でしたが、Newsletter 2号は真夏のカナダ、トロントで行われた第86回IADR総会・学術大会の学会報告中心の構成です。今回も参加された多くの先生方から、各専門分野の研究動向やトピックスについて、会場の雰囲気まで感じられるような生き生きとした報告をお寄せいただきました。また今回は特に、Council Meetingに陪席された日本歯科医学会会長の江藤一洋先生から、IADRにおけるJADRの影響力を強めるための方策・・・として、具体的内容にまで言及した示唆に富む一文をお寄せいただき、紙面が一層充実したように思います。

さて、今は第56回IADR総会・学術大会(中垣晴男大会長)の準備が着々と進められているところですが、次年度は第57回大会が中国武漢で開催される第2回PAPF学術大会(2009年9月22日(火)~24日(木))との併催となるため、国内大会はありません。詳細はメールニュースや学会ホームページでお知らせします。参加に向けて今からご計画いただければ幸いです。

発行 国際歯科研究学会日本部会(JADR) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒612-8082 京都市伏見区両替町2-348-302

アカデミック・スクエア(株)内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR副会長 高野吉郎 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野)

連絡先: 〒113-8549 東京都文京区湯島1-5-45 FAX: 03-5803-5439

2008年9月30日 発行